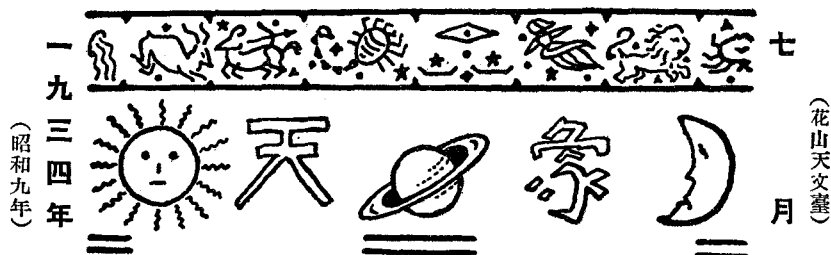


Title	天象
Author(s)	
Citation	天界 = The heavens (1934), 14(159): 358-360
Issue Date	1934-06-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/165544
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher



I——太陽と月 (天空の明暗)

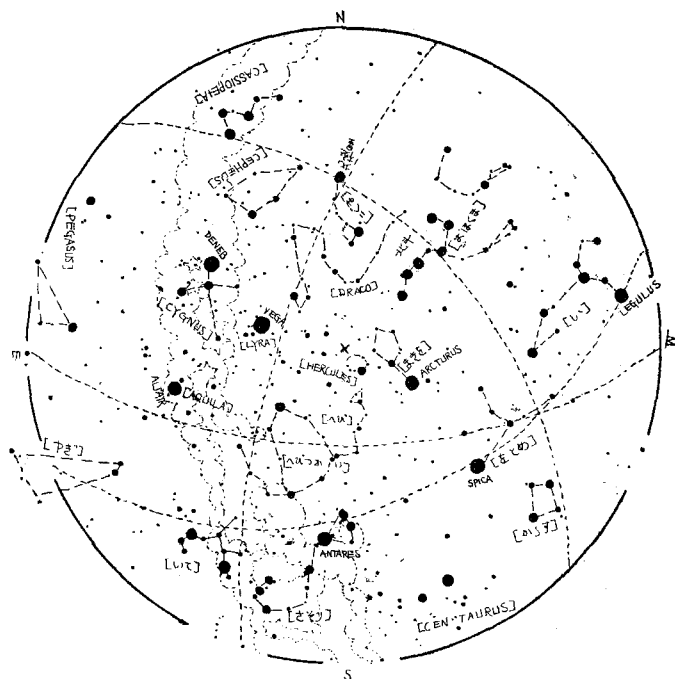
日付	日出 (星座)	日没	日付	夜半月齢	日出 (星座)	月入
日	時分	時分	日	日	時分	時分
1	4: 46	ふたご 7: 15	1	18.9	22 18 (みづかめ)	9 8
6	4: 48	〃 7: 14	2	19.9	22 34 (〃)	10 16
11	4: 51	〃 7: 13	3	20.9	23 19 (〃)	11 23
16	4: 54	〃 7: 11	4	21.9	23 45 (う を)	12 28
21	4: 58	かに 7: 8	5	22.9	— (〃)	13 32
26	5: 1	〃 7: 5	6	23.9	0 16 (ひつじ)	14 35
31	5: 5	〃 7: 1	7	24.9	0 50 (〃)	15 37
			8	25.9	1 30 (う し)	16 36
			9	26.9	2 15 (〃)	17 31
			10	27.9	3 5 (〃)	18 21
			11	28.9	4 1 (ふたご)	19 4
			12	0.3	4 58 (〃)	19 41
			13	1.3	5 56 (かに)	20 13
			14	2.3	6 54 (〃)	20 42
			15	3.3	7 52 (し う)	21 8
			16	4.3	8 49 (〃)	21 32
			17	5.3	9 46 (〃)	21 57
			18	6.3	10 43 (をとめ)	22 32
			19	7.3	11 43 (〃)	22 50
			20	8.3	12 47 (〃)	23 20
			21	9.3	13 53 (てんびん)	— —
			22	10.3	15 3 (〃)	0 1
			23	11.3	16 11 (きそり)	0 45
			24	12.3	17 16 (へびつかひ)	1 48
			25	13.3	18 12 (い て)	2 56
			26	14.3	19 0 (〃)	4 11
			27	15.3	19 41 (や ぎ)	5 39
			28	16.3	20 16 (〃)	6 45
			29	17.3	20 47 (みづかめ)	7 57
			30	18.3	21 16 (〃)	9 7
			31	19.3	21 46 (う を)	10 15

II 天 象

日	時分	
2, 3: —	252B. Aqr が掩蔽	
5, 21: 40	天 (南 ^{6°7'}) と月と合	
6, 3: —	地球が遠日點	
7, 12: —	木星が東矩	
9, 1: 17	金 (南 ^{6°1'}) と月と合	
10, 3: 15	火 (南 ^{3°13'}) と月と合	
11, 21: —	水星が内合	
11, 23: 43	水 (南 ^{6°55'}) と月と合	
16, 14: 3	海 (北 ^{3°57'}) と月と合	
19, 12: 10	木 (北 ^{6°38'}) と月と合	
22, 15: —	水星停留	
22, 22: —	65B. Sco が掩蔽	
23, 22: —	95G. Oph が掩蔽	
25, 10: —	天王星が矩	
26, 21: 15	部分月食(食分0.668)	
19: 54	初虧} 日本内地の全部	
22: 36	復圓} から見える	
28, 12: 15	土 (南 ^{3°11'}) と月と合	

昭和九年七月の日没後の天空

(恒星時 16時0 分)



さそり星座

オリオンを五月の空に送つてから一ヶ月、梅雨あけ南天に見えるのが「さそり」星座である。銀河が南におりるところで、ひとしきり明るくなつてゐるが、この河にひたつて「さそり」がわだかまつてゐる。明るい、さまざまな色さした星々がうねうねとしてゐる様な實に毒々しい。

普通、吾々は黄道12宿と云ふが昔は6個しかなかつたもので、「さそり」はこの天秤迄ふくみ、「乙女座」に接する巨大な星座であつた。それだから知らないが、乙女座の記號と「さそり」のとはよく似てゐる。まがりながら連なつてゐる星をみると誰でも長いものを想像するであらう。實際長い體をしたものと云へば「ヘブライ人」の様に Basilisk (へび) とみるより他ない。又長い尾をもつた毒々しいものと云へばまづまづ百足虫か蝸である。星座の出来たのが紀元前 5000年頃とされるのもこんな特徴の多い場所だからだと思はれ

る。占星術で云ふと呪はれた星座であつて“active and eminent”の表徴だとある。又太陽がこの星座にあるときにのみ鐵を金になしうるのだと云ふ錬金術家の信仰もよく考へたものだ。

オリオンをさしころした毒蝎だとも云ふし、イスラエルの子をエジプトから追出すとき送つた蝎だとも云ふ。又古くエジプトではアンタレスをイシス神だとしてゐた。蝎も時代々々により、くだらない化け方をしたものだ。ごく近代になつては百足虫となつて花山の御歴々を毎夏なやましてゐる。私は蝎座をつゆあけの空に仰ぐと憂鬱になる。これは餘談中の餘談であるが冬は出てくる昴星(プレヤデス)が天球上で云つて蝎の眞反對にあたるのが一寸面白い。

α 星は眞赤な一等星でよく云ふ様に アンタレス——火星の敵とか 火星に似たもの——とよばれる。支那では大火(タホ)とか参とか云ひ紀元前 531年に彗星の出た記録があるとか。この星は赤色の巨星で星の一生涯を考へると赤ん坊の時代である。とても大きな體をしてゐて例へて云へば火星軌道の大きさに迄ひろがつた巨大なガス球である。光度は0.7等で7等の伴星をつれてゐるがトレミーの時代には2等星と観測されてゐる。附近一體は星雲につままれ、すぐ西にメシエ14番とよぶ美事な星團がある。1898年コデントンはアンタレスの二度北に一彗星を發見したが之が寫眞的に發見された第三番目のものであつた。



β 星は Graffias(カニ)と云ひ、美しい3重星である。紀元前271年に火星がこの星をかくしたとある。

ω 星は14 $\frac{1}{2}$ はなれた肉眼的の二重星である。